細流抄

十

内閣文庫	
番號	和 25096
册數	10 (5)
函號	201 758

内閣文庫
和書 類
二五〇九六號
一〇冊
二〇一函
二四架

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

袖中物ノ身九　圓縁

春の海見ゆる
うそいかゝし　ひるこ
きてあそは

志かしのもえ九
まつし鶴
内ら海の鶴

とまれとや波こ
山の内ゆかる
あ紙ありし

とよみつ鶴
笹のこゑその鶴

袖中抄第九

しほのみちくる
見わたせはいはねにかゝる しほの風ふく
らうたき松の波かくるかな見ゆ
顕昭云この哥ハ見わたせハとよめる
めてたきまつのしたかけにこかくれて
みえしうらの波のよせかへりひまなく
あまの袖のくひくさはまてあらなる
くおりかへしとよめるやうなれはまうちかへ
はさ波のもしをとかきつくへし

六帖よ伊勢斎
志海乃しらなみ花にもか包みて
さゝしかあゝくきへの船かさへ
あまてもしも今我をまちをとくよるはしも
かもつらんとまきらしあり
又伊勢斎
あ海の釣のあまのうきのまゝしきのほり乃海乃
かのほりつくろふおもひつきてさき
ま猶も我船しき海あきや
伊勢渡云むかしたの大海うちきらん出

名れさやくよ露をまつさ船くゆらくさゝく
ゆらくされつ春の乃淡(?)くさら國乃さきなり
乃へ我浦乃よみこゝあらおもらし風さそ
さけのこしあそひく我あけ給てにの
とかくをとし給ふ御むすめをよしむそ
こよあらくるのひおこさ御かけてさきまれ
あくさよもひおらさとく人よこなし海をとし
てこのとこ沖
あかの海よりつきれ年んあさるれよ
伊勢と沖の御孫をとくよめしらる歌

とよりくうちの見んちれにみゆいつきこあるうちのよ
あやしう松くしう奇とよう御良うつう給
うり見んうと六千余里の中に志良の海とふ
とよりよ汐うち不ハゆかうくりさ称てるんこの
松さみ行くよあくさめくく志良の海よいあう
ききよ宇なんとんよのめ給ふうう宇あう
あまうみ行宇あくとやうの海おめつうあうるとあ
ここえうあり
文字絵同名称之　海竈宮
此絵ハ田村将軍討夷之時又万八千人之首絵

きうしきあめの竈なら地のお良の海くるいふ
たゆあ云見んちれくのちうの志良の海ちうあく
志行のうききくもこひとくろのうよ　右注
うらききさきこれあらぬたあうら
志良の海のよんようみあめつう嵩しきれ
うらく松さひのあ行ようらう宇あり
奥義ね云見んちれくあいふくもあまてこそ
あまうそそのくう給き宇くちくらあくおこそあ
よゆうの行よやこの見んちれ宇あくあうつうあ
家あるあくぬこうの給う奇まうさくぬがく
いくみならうこうあくぬ称ていふてこゑなく

国立公文書館
National Archives of Japan

捻く色もしらぬをみなくれなゐにゆく
うもの形くえ田まへの形く義ありくれ川也く
以大かなれのあきゆくこの乃わくれしるとおく
よりあの形の
此義あり接続のくへおもひまつあれといふかん
しくくえふ色し
義者云これにあふかなくお禄くるに
ひとへ人もなりくるもの系のし海老松浦かへ
うもひの袖のぞきれをと浦の形しとふあ
分なり

色もいろく紅のしむ浅みくの形しとてたるん
あれ浅みくの庭うらひのきれとむへ今しれ
ころせことをとやうれ庭のくえかの海の
海の系乃し海老まんき同じ本
同じく云海のさこのし海老松はよせてくるめりて
さうきの志海とまるの海乃おきとるわ
帝王系図云為尊親王乃男し海うなれ
明神まちのひ事あるくひとふれむともめ給
ゆくまゆらくひ神老宝殿乃内ておし
堂てくの色のよ名のこのむきもあたれにし

ひく神武よりこのかたり文書にもこゝろよ
ん海とひよりも猪とは神武天皇のかたゐ
清さのの月にんの表わもゐやとなりひとりを総
きしとちのあつめよりてあひのまゐるの
日本のかくさかへ人をよあひえしを伴のむしとの
まんの子孫をよはせ給そのかみより季貞流

奥圓風説云く

とものみやつこ

とものみやつこといふハとものみやつこを総あり

この玉をもあきらかにするなり

顕昭云とものみやつこといふハ主殿寮
乃下部也武人のの下部なる伴氏なるゆゑとものみ
やつこといふなりあるひハ神の下部ともいふこれも
なれバ神祇官の下部をもよばれとも人
ともいへりこれハ諸司よりもつかさどるもの
伴佐伯二の氏をも同じ姓にてつかさどるハ此姓
之を氏と路ふ姓とし諸寮之下部となる
その主殿寮ハ伴氏のともいふ

奥義抄云武人云主殿寮乃下部ハ伴氏
みやつこともいふこれハかの氏のものゝ孫なり

とゆうちにあるかすりしハよしの字をもちゐ
たきこれにもやとらこともしらすや魚の人々民を
奴とさくら御奴との魚はしと海とさとくへ
とゝもよりあらはに　おもくさもすがたもあり藤
ゑらひろく浄しき
とよめ浄も吉事に之いひて紀にてよめ統めき
ゑてこゆきに文ねかうに大領小領などゝいふ
にも我をはおかれのくたまいつとものゝやうにて
あくるにより日迎にはなしへの海をおほやさ
乃海をとはきやうにとゆふ意義のりしうて

溷とくもたるといふ字なるを海の乃事に傳説
之とやうにとよめ浄なる儲なるへし
今云男色よりは衣乃驛（ソヌキ）とよまれ也るは紀にしるしてしこ
故とかく小事とも也ひとくも名にいかれるなるへし
乃いとおもしろき事にさるから云乃義あるへしるは
縁縁櫻云とゆへの流のさまいにしとこれはやつ
私云おもハあしかうん
しといふ下歌乃あるなり
私云糟粕云とくれはや流しといふうしなにてとかして
私云うらうくもいかれとも
かりとも海つゝとれをいふなり
実清入道云ことゝれてあきとはとこれとは

あしからぬさとにもありのりはをにかまりむしく
云八雲御抄にも万葉にはあむなとある紀にはむかし
紀乃義ありへきにや
うるいろしひるこ
かくいろしいふはおもしろけれともかなへ難し
ことに諸抄にかなはぬものあしくもしらく
顕昭云ひるこをは文字にはむかうして日本
紀にはひるこはいかにと古語拾遺にも
よむなるし　綺語抄　無名抄　奥義抄
童蒙抄　にもかくのみしるせり

然修理朝臣云
かくしあみをなくていひまむにもひとひこれ
海まつにまるつくるにもあくとおもひて
或人難云僻事なりひるこは文字にはもろこしにも海のあし
いひしふを知るいひ思ひかくふる見たり
今案にひるこにあるは次日本紀にはいかにも八丈
いひし海にひるこれ万葉集にいへるもいへし
此ことにあるは万葉にはいまくこ海なり
あしくは次或ひといひいまもしあるいひへの
歌もともよみおしいひるとは侍るに海中にあ

る事をしかゝる日本紀よ付て不見ん方素
しく雑さゑかゝる
みことせよかゝぬわかつあつ次しくとの方ハ蛭子の
事く

日本紀云伊弉諾伊弉冉尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神次生月神次生蛭兒雖已三歳脚猶不立故載之於天磐櫲樟船而順風放棄次生素戔嗚尊云々

多名物云いさなを見らんあくハひるあこる絵

ゑくはへつるかの蛭子ハ人のかくゑびすとも
さのきあゝまとの御くわしゝあなとあがめ
わさかゝしかゝれてはかわかくれ行く
わさかめかくれて蛭とハいふくく年月を
さわかり三年までそあわれなる浜絵云
あさかゝしこ海わたゝつく見んと世あわまだは
よのあまんかのひるこの御こといふへしとる
かくてゐ三年ハ不たゝぬかとくくれりてそ
なつくよめてかたわ
或人絵云和田やまとの浜の海わたゝハ何不業

竟宴卒勅勘人不下給題也
私云翔隠者奉三年也當時非勅勘故不竟
宴之題者也或非大織文章博士也
奥義抄云いさなきいさなみの尊蛭子を生三年
由くおもの橋のもとにあしもたゝすして捨られし也
書紀蒙抄云先陽神左よりめくり陰神右
よりめくりて國乃柱をまはり後あひ給ふ時
しかるに一面にあはせ給ふ時陰神まつことあけして
あなうれしゑやとのたまふ陽神悦給はすして
あはせ陽神ことあけしてまたあはせてかくのことくして又

二れ數ゑしとはつまはしらしてゐるかな
いふこと無れ歴ある乃久しくあしたゝぬさいてまや
此名を蛭児となつけたりと云
今云考二日本紀之前後を見るに陰神先唱故生蛭子是
之条全不見事也都ゝく更に陽神先唱生大
日本乃豐生日神月神生蛭子生素戔嗚尊
也但一書云陰神先唱云妍哉可愛少男歟
陽神後和之曰妍哉可愛少女歟遂為夫
婦先生蛭児便載葦船而流之次生淡洲
此亦不以充児數故還復上詣於天具奏其状

時ニ天神以二太占一而卜合之乃教曰婦人之辞
其已先揚乎宜更還去乃卜定時日而降之
之故二神改復巡柱陽神自左陰神自右既遇
之時陽神先唱曰妍哉可愛少男歟陰神後和之
曰妍哉可愛少男歟然後同宮共住而児生号
大日本豊秋津洲云々

庭燎のうた　ゆふかつら

まきもくのあなしの山のやまひと
ひともみるかに　山かつらせよ

顕昭云此哥は古今集かくらうたの中にあり

とのもりのかく　山かつらとは神楽にかくるよ
まさきのかつらなとをいふへし山かつらとも
いふ

旧日本紀云掘天香山之五百箇真坂樹而上
枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡
一云真経津鏡下枝懸青和幣白和幣相与致
其祈祷焉亦以天香山之真坂樹為鬘
以蘿為手繦古語拾遺云種麻以為青和幣
穀木種殖之作白和幣是木綿也又云掘天香山之
五百箇真賢木云々又云以真辟葛為鬘

葛蘿為手跡以竹葉飯總木葉為年

草紗　一久佐

今案目木纔以真坂樹為縵といへり古語拾遺

にハ以蘿葛為縵とありこれ遠如何なるにかあらん

すなはちと其詞のよろしきやう賢木なとによりてまゐらせ

神事にいふめうなる人のかの枝葉をよくつゝまくら

こんきまやまて神に拝事よりハ取物中に葛あの

ありけるにはしたのをとつくりけり

まきもあらあらしまんをのの山人と

ひとさんまるくくにさしらせよ

海さこく丸わたしの山ハ大和にありとかくいへり

あらしの山とハ見るもひるきるやあらしも山と

山城にしてもあま大和にハあさあらしきと両また代て不

同葛家の羅國に見てはらの末よ見まえ

深山にはあらし海の飛しらしやさしたるの

さいくのつらいるよろしく

但ハ情御神楽にハ是採丸をはらかく思ハく別

に葛をもて海とよむんかもし又さるきにあらく冠とせ

いふらし深

続後撰云海家かのさし新川をもて海さくも

とらふ武人なりの歌よりこころも詞人をし難かれ
おくるかりけれとぞとられくまでし歌よりつ
難きかりとりたいそのこ歳とも惣あり道かたけれ
山からもの声らむたま山よりこと難りとひ事こそ
のらん難きす深るか

今云山からも深くまつるくも秋歌よりつとらふた
なりよりさこらふよのあくるかりしよ事ちれくく
深らのもあり歌よらば見ゆる歌よりけ
深しも御人からあつ義ふくらのくるのやは
いらた人かれん事ども歌し

奥義抄云人をもうごかすとは風俗乃詞とて云る様
歌くとらんく
歌よみのかハ常乃不審也

教まで云あるの山からも感じとかくは神未から
歌也人よくも歌はら紀乃歌もちも事くさ深ふ
ふ鬼家の妙深くはまかろ人もなるふまで云
抱をさいわうろよひをまりくし倭るなへ
鬼は神事とうやまひりし歌うもおのくさ花紀
歌の上つて奈るとば神抱から時きこの所を
なしらめ経乃ひの人の心を極むかやすからしまう

ところ〳〵もかはる白帝も神慮乃昭かに冠
をゆるし世をさけし海士ころの神慮ふかき神今
食新嘗會ふかくて帝の門から彼神袖をとりて
今古勢おほし海士をやさむ代々の事海士するか
又おもふからこそ筆あり同神事歌又時に音説
ひらかなまた八神楽よりうたあるべし
記されぬ所ある様よりゆるかるせり
此方を順にしてゆかしくさかそよみ海士一方を
とおもひあきさく方をも又文時にゆかしく順乃め
左右つらくにそうかはられたる故六条なる京

此八白んらし残してかたの比わたるさまに給へくえん
とそ此方上句より海士こそ綾ちへうちし九八神
弁んなる歌
又古き枕言葉によりてくれんとてしも井あをたわりまつ
さまへ食ん中その月日のあまかやさむつらくの小作
食りつしはさら歌なくはたふくめるの推古天
なさまに伊勢や
とくおもとを
とくちとか　さへ浮つをもてつかまつり
あふら海士てらさ　是れとぬか様し

顕昭云さしかはりかへてちかひてといふ也百千鳥
とは鶯を云ひ又もろもろの鳥のさへつりあふをいふとも
名さつくる鶯の梅にも住むとあやまりて稲おほせ鳥といふ
右は此万葉集にいふ
百ちとりといふハ鶯にも限らす万の鳥
ちとりかさなりてさへつるをいふ也
此家ハ下句小ちとりの為に呼子鳥ハいふといひ
法まてしらすとてそのこゝろをあらためてまよひし
あしからて万葉にいへ
ひめれ
楢もそのはなからさきはしりの

あくのとらり義をあらきころまし
此家ハ百鳥ともあつめて続くなれは也万葉よ
國ハ子鳥とよみて國百鳥とよみて百千鳥とよ
あかあ朝しを當家乃説ハ
今此古きところとをといふなりあへかく次よ
秘説乃家ニ在をあへて家よこのところと
其の家ハ利かおのいふ義あとからの花なも
勝よそ秘まてしい事らまてされた
みるよしあらこ観を法し法方を伝そと
いひくるゆのをゆ意をうけ事し也義

うくひす
文徳帝の御時に志賀の山に鶯の宿をしめてすみける
とのもりのつかさをさしてなきけるをきこしめしあはれ
因六帝の御宇に百千鳥一首のきこゆ
或人うくひすを百舌鳥といふ也といへり
乃いふ所いはく種もおなじからず
日本紀には百舌鳥野といふ所あり又は
ようくありて順和名にも鵙と鶯と百舌
とは同じ鳥也といへり礼記月令に五月中旬
六日鵙始鳴第十二日反舌無聲とみえたり

此反舌は鶯也と云反舌はもずと申人
ありされども鵙はしめくなくといひて
なることなしとて反舌は百舌鳥也と易通
卦驗曰反舌者百舌鳥也能反覆其舌
隨百鳥之音云云反舌を百舌とは月令
ようくひすとよめり百舌を鶯といひて百千
鳥といひ鶯をも百舌といふうくひすを
百千鳥とも百舌鳥といふとも
相逢歌
無名抄云よくよくわきまへやへはなれて

とわかやいへるも所にそ猿してよる詠めるとわかれに
は又詠める也あまたし又詠めるも所によりめり
は鶯也思ふ内にきわかむしとよめりはきさらぎ
内に鳥と云ふ也髄脳に鶯をさえずるより
どうなるか不詳字にて事一説もなくひとまね
もあるなりけれ
綺語抄に云く百千鳥とは鶯なりと云也又云百
千鳥とは也とわれ名まへあるしよろづの鶯
ともいふ也さる詠めくのとりもはつなく目へなり
童蒙抄に云く鵆とあるとは云ふ也これをかと

鳥也と詠みは猿くのどりのいろいろなく
又鶯を百千鳥といふも又一説に名よみとも
いふなり
此事とも詠むもとく喚子鳥を詠くのとわ
とも申しいひくあるとなき鶯ぬらちをとらく人を
といひける人数をいふなり
奥義抄にも入詠みもいふまでもなくひとのや
いなおほせ鳥といふ稲負鳥をくのあをいつと
も説に非ず又童蒙抄にもよくひともに百千鳥と
いはれけるに非ずといふ鳥説ありあらくなるは

意く先まふ香れとらくひとそふあの海しきよりたそ
おもひきくとあむまうにあるし併るらう
文字集云百囀鳥
見ん庭さまへ流さきを流くめもとそ浅らう
と絶らやく声れなきくる絶ちく流の那し
鶯
ぬく流る毎ふの数かを流くもとうくひも声き
毎ふくめくとくなき絶えくらかれ
此哥二首あひをうへく是之別るるとも見へくまうり
あ織ゆくし

あ織ゆうしうらのい色まはよろ移まり
まかれまうえん ま悦うしとわたるふる
顕昭云 孝霊紀云崇神天皇十年秋七月
武埴安彦与妻吾田媛謀反逆志て軍を發
して忽ちむつまくと路を取くて吏も山背より
婦ハ大坂より入くて帝京を襲くして天皇
ハ五十狭芹彦命の師を率して吾田媛の師を撃
即大坂にて要くて吾田媛を殺くてゑ共の軍
を斬つ後大彦と彦国葺とを遣はして山背に
向くて埴安彦を撃つ 家忌に先ちて和珥

乃武鐰(タケスキ)坂の上に鎮坐して則精兵を率(ヰ)て進(ススム)
て那(ナラ)羅山に登りて軍をなす時に官軍屯聚て
草木を蹢跙(フミナラス)す因て其山を那羅山といふて
家よみ忌瓮(イハヒヘ)をもて和珥の武鐰(タケスキ)坂(サ)の上に
鎮坐(ヲシスヱ)といへり忌瓮は青瓷(アヲシナリ)仍て瓷(シナリ)にて作るを
瓮とハ可写しおほせよといへ訛(ヨコナマレル)也委見日本
紀第五
今云ふ青瓷(アヲシニ)又和千日本紀より可用之歌詞
なれハ不可用猶可考也
清濁ニ和ふミしなれとハことおはゆいはたれいふ

ハ冊書をもちゐるとことハさきに書図なとも
なりしかなれと冊書ともいふ黄又ハ冊子とも文書乃薦し
異説ハ書をいひなかるからになれ而平(ナラ)城乃歌
物乃めしとある紀をもちゐるとしく和歌なりし
なりけれはいひおこりし忍ひあをもちゐしおこりとも
其名事とも万葉よみわ
ら歴しくもくらしさせてき和歌なり
まなひちあまくさ歌をもしもの也
春権式云平城(ナラ)京をもちゐいしとの也
万葉物云和歌なりしるきよしなりけり

むかしをお偲さ出たれわか序ゐる歌に入れさせ

ともかく絵かく冊子に清けにひろふなきまかかる

なかさ續きうくまあることく

志るしの杉

わか庵ハ三輪乃山もと恋しくハ

とふらひきませ杉たてるかと

顕昭云あの歌ハ古今雑部に読人不知歌とし

あひかくやまと詞に清書する新撰の意

乃紙に書一本あり世人あまねく三輪明神の御

歌と語りつたへ續と裡て志りうくて其歌云

志ばされとも只三輪乃座すのかしこにふるこそ

人あれよあるまく侍るあめわが家をたふねくるる

しれもえ紀との歌しをふみならしかはれ

或ハ三輪乃明神をことよしの明神の相かれあと

へりよひ續かなりまよ

またとよしれきうしまんまうしんきれゆへ有

神すくやひとに清けと哀まへん

とかく続へる家をは指遠物ふれ

此寺住吉乃神君は清瀧宮とし家しる也れ

三輪ハおもくく神あらくおもくして後と哉りけり

あらはしハ女神とさこゆ也

又神功皇后征新羅給ひし時住吉ハ大將軍日

吉ハ副將軍として遍討し時ハ日吉ハ大將軍住吉

ハ副將軍也三子の法給ひし記に得ゆへにそれく日

吉住海さら給ふし記に得る由あまくられ仏者を

出入し住吉おゝこ神ならとこれさまうつひさら海世

乃宮をさ三輪乃明神とこよしの明神よたく

まつり給ふ乃御事と海らをとめ遍てし女神也

三輪ををも下り中欲女神乃男女不審あられし

とらく海うしかゝつし思ひし神遍難御事あく

くしれたて宮中に御たちあうまつくさだれたりさく

事之住吉四社乃中に玉津嶋姫乃おもて海

もろハ女神とやわ其ハ衣通姫乃うわさ女上ふと戸

八世てゞ遍御事し日本紀にハ住吉大神大三輪

神花神代ありて大三輪神ハ住之靖山よ在て

住吉大神もとこの江の宮なるに云四宮江之三筒大神

也然悉く御魂ともに常にまれる飛鳥小戸ニ和魂と

玉嶋津田宮江坐神功皇后御して選居務津

乃墨江ま坐て左経精業云大巳貴又神大

和国城上郡大三輪神ともに也又神功皇后八三

輪明神の垂迹と申事ハ
又日吉明神と申ハ三輪明神を傳教
大師の天台宗守護神としてあがめ給ふ於叡山に勧請し
あそばしけり爰へうつし申ハ大宮権現也大比叡
とも申次二宮ハ地主也梅の宮とも申次大宮ハ本
地ハ釈迦垂迹ハ法躰也二宮ハ本地薬師也
垂迹同之
三名杉と云ハ昔しるしとて三輪乃山
たまのゐとよりむしろをみなせるへあるなし
昔大和國に男女ありけるにつく年月へける
たれとも昼はかへりてよるはかよふこともなかり
けれとも女房ふしぎにおもひて年来の中なれといひけれ
そのかくしける糸を針にさしてよるとをしけれとも
こゝろさしあるにはあらねともさてかへりける後
かくしけるにはかくめくらかしけれは針のいとの
さいひたれともしるしのあるかとつかはしけるに
そのあくるあさそのいとをみれはかき殿より
そのいとハみえ給へといひて其いとも
そのかくし其の中よりわかれてひとつに御殿へ
といひて久しくまつはしらしめしけるとみえける

ひさ義なくちなへとくち海りて三種ねとろわさなく
海ら武おほひくれきぬろの教え孝らこれを
見んくわとろ者れてくへりきあとんあせもそり
こら親もみ三ミ種んあせそちち紀よありんさと
とつひち紀りく形く列重さわ女女うて海
ありしあひしかうんあと紙あけさるく夢ます紀
あ門あ毎の紙も無そとこへわその無をほゝり
をほぬくさのちり将夜れ法りよさしに
乗ほ宇は重てその夢あとはも無あくてり
孫ゆきうくみ重ても三輪乃明神の形なくてり

乃周よいまつりてその末のへあわ乃三ちゑ宇のあわ
毎ありれても三輪乃虚よしく心をあへとの毎り
素盞嗚尊の後に云若伊勢國あつさの郡まちもりろ
人其深山よのりく麻まちそへりろ神にて風吹
毎ぶり氣更にあくなりしく来とねあり形
星しく長毎めりし目いて来る星のあらくし
ているもの光よ渉あり猟師もを射くほく
りて其度風毎風くこのりの妻乃あく事まり
よ血乃流よ流こく移りくる遠り形り山中に
をありても形まりく野中よ塚ありと聞けり

里にて其嫁君なり神女なりしに里にして
また稚くちゆゑりやをとをけしくまいらせん
また神女をさして学しきなまくらにいひしく母の
いふらくうれしも扨も此頃ハ日にそむく見なたちとなれこ
乃おふくも過ぎて年来じ頃のふまもめて彼此
見をしらでを座しまして座まうしし此をこの家まいる
まさ嫁(ツマ)なくちよ里へまいりて兜をも涙の学ひて機をなる
しるを後この神女をも具して家にまいりあひ
始住事三年になるにまてりしきさたたへ
ぬ又兒一人なをえ産みし如くなりし時は泊しきこ

白地にありきにあり其いにし女にせぬ海気にて見え(ミエ)
ふ女をさしく兒一人ありり泣悲しむしく我所
みえ紛にをせ不知ありくありし此兒みえせぬ
孫泣悲(キキ)しむにしよけし女乃せまふめたりける親と
おはしまし汝に三輪乃座にまふなる紀さてそれる
つまくはらむ紀伊にまきあまりなく太和
國より移りてわたくこの人乃明神の社にまゐりくこの
女よあやふ面ごとうしを祈りかくなりその座すゑ
乃源氏をもしのぞきてこゝろ入婚ふ兒も同
こゝ極はおとこ志乃切なる事すゑなるく其よ地

ひさく神よなき程りしかバくあらはれまゐりてよろく
その神むかし予がもとに伊勢国あふぎの郡丸人むかし
おこるがたりさまてまゐりて之れも紀とらい云るより
あし後よりくく鬼よ神ともらくい梅さし之
今云名物乃説よ流きこゆくなられるこれ差
給まいてことまの尾まうら事とらいふとる人
あまりと日本紀よもへ家やさしらぬめ乃こあとの
事ふ似ぬ物ちあらしく流
斎宮の物乃説よ流きこゆくあまいても梅のき物語
なりさ程と後ぬ神乃鬼ありとらる主行事も

うつし筆のくさぐさ又其説あしく神と
きこゆる説よは女神ときこゆる極不審也あれ
物語あるて和哥ニ流きこへ作出たる事也
大和へうつふ人をし三輪乃ま紀よよせてうたか
よしとて流のうへうゆるよふせてよしの
きこしよ流を事く人は流るうしとくきこゆれ
まうく事や本まことも紀ちがふ哥ともよろしく
あらうちよいりありう序哥とふる事はあらし
あまさうなるり
三輪乃山いかふまちらんとらし梅しよも

まゐり人々もありしとみへて
三鳥乃出志るしれ給ふらせたまひ
なかまへらん人まれまれならせ給ふ
まゐらせなさやうに御心をゆるさく翁まいらせ
さてのちあやしき法印よみまゐらせ
このやうのことにてあるしもあからさまに
まゐらせしられ翁のさきまさまし
奥義抄云この三鳥乃此の稗と稲も百千
ことさら乃日ハ都乃ことさら三法くらくい
さのうへよふしさらに穂なとにさまのるら社

乃おほせぬおやしかくのしの稲をおのまわ
てあるくありかれ乃鶯（カラス）百千（モヽチ）鳥いへく事わらく
又ひ屋なるをさまからくたれよとそは
名くら鳥くゆゑにちかよるかまて稲負鳥
あくひるしまうて法くにとゆへとそ
もとる鳥ふ鶯
これらの鳥ハことに人々なる世とわかよこなり
ことさら鳥を見るあれハきせまいれ給ふ
顕昭云なる人のこの鳥を伝へしに見れる
まかるわりやうにつらふる鳥屋ふくらも

のうたを旋頭うたといふは三十八字の頭をめくらし
ことはりの旋頭うたのこゝろは黄鐘調と申すは初五文字
をかしらとして一歳のうたなれは盤渉調といふこゝろなり
またそのうへにかしらを二歳にて絲(?)とかさなる
うへしもを結二歳にてなかうへかへるといふ心にて
あまた句をつらねて次第にあまたの事をあらはし
すかたのうつりかはりゆくをいふ也
長歌の言葉を見るにつゞけてなからへたるを長歌と
たとへはなかの心をあらはしてせんとす
ひとつにはむかしのためしをひきて詠する事
いふ事をいはむとて歌の詞をくはへたるを
人まねにくはしく詠するは旋頭うたといへるも
長歌の言にありて歌のことばのつゞきて長歌の
ように心のうちのことをことはりて次第に
八句にてあまたの歌をつらねたる長歌の
くわしくは其歌の道をしる人の歌人と申す
ハこの歌のかたちをことはりてしるへし旋頭歌
の詞の事よりはしめて歌のくはしきをことはりて
とうたのことはり(?)にて旋頭うたの詞をいふ也
てあまた次第にしてあるを旋頭歌といふ
も或人長歌ハ此歌の心をかくへしといふ

とく負てとらす同じ事成と海せとき渡ともつ
是いかにもいかにとて度数をかさねて負ぬれ共
又ろくさとしとて悠暇しくくとつゝといへくもなれ
もいろくく銭の出る所なし
はて馳走れ是又度毎に負れ共出所の
ハなくて渡しさきみえ志かし
こゝかしこあつめて度々におよひしをる事と
いふときこし召て
或人申けるハやうとしや御わたりやなにゝくわ
むかしの負のひとへに何のかくのハへきといふ

もあり負ぬれハ渡世なれともさらにむ用
きて或人申しけるハ負の事ふと七つのわけ
あり毎年申て十度こそ人もあれ渡とくへら
ともいれも海ミし事あれ共負てこそ有るへく
渡しもせ十度つゝ山とも海をさりあるへし
りこの所負をもらひ海事へとらへ丸京の
事の負の八萬円とも負のもれともいふ
志らぬ事ハ年へあるかたの志らる事なれ
てあるをも浮かくつ海とらとらふ御亭と
風よろしき負とも患そのころハ馳走らく

鶉といふ哥も梅の縁にしたかへりと證歌といへる其
万葉には鶯の鳴といふ歌もあまた侍れとも又ゐ
となきて只鶯にしくは鶯の鳴きかへる声をいふ事をさへ
思へとも鶉をも鳴かせ侍るも又ふる鶉しきこえ
あはれにも又とらむかしかやうにもさや〳〵に
さんなれは文の題にしと云ふ證歌は又ある也
みえしか詞には常にもあらて聞もの間あまたに
いふは雛を梅に鶯とみえしかは鶯もあり
縁語物名なとにも又さもあれはこそいへると
ともにうくひすの声をきく梅なり

又ことやかく久しく古きかたにもやさしかれと関屋にも
あらしとらく〳〵清気の名もしのあさきもみなく
久しきにえかくも色かはらぬ梅は緑の色にもみえく
さ梅に物なや清きあひしもなくは縁なるへけれとも
梅の香のさ梅にふきて清きをもとめ或は雪をあらそ
てかくれなきかな
声立て物とやかくるといへは色に鳴きるといふも
そのことやかくなるも也
奥義抄に云とりかへるといふ梅をもかたる縁にもこの
とやかへりきといふことを見れはいひつへき事なきとある

とく梅さへさくらおもんちゝぬるかれとむへつゝ山かくれ
去ねてこしみちの浦さいてのわ井寺かくらいやよ
かくらの月とぬ浦をもとへるとりそのぞ
ぬの杉日浦ぞす

ちりし梅る

とかへるまうたそつゝしのそゝしぬのまむ
く浦とそのおゆる浦のもしのゝ忠
顕昭云そうたうゝへとやぬの便ち御をの恵今を
とやうりいそしく都くわともうまくりおいく浦
人ゆんも乃くのくさ梅の花のえてとこらおろぬ

てた家てしよくらのえむらるすゝ仍もしくぬらし
とや便ちしぬのとゝへるや山せんさらへとゝゝおあ
家えて不審あまつ見鶯飼ハてともうをおひるし八
浦ゝへくそ曲るもハ左こ愚府生上道寺植
日本紀よ月ハしぬの松保二年三月廿七日条ニ植
をハ昌泰前上府生さく
今案よとやかくまりくらしるをそうたりと
行ハあちそし浦まてぬ杉日しをと杉あへ
高ぬさやうふみふくるとえけるゝおしくまい
ミのそのそこうえ々全

又鷹乃中に鷂といふあり　是ハたかのたぐひなり
雛鷹の雨小鳥野の鳥をもとらへ鷹の類にて
て小鳥をとりとらへてかるゝ雀ものにて候
をば是ハこの鷹の中に狩鷹の法にてとらせてとゝ
たかくとも云鷂よりとらへとも一橋のきたるよりも
兄鷹これをりとてむねを小鳥をあそはれて
これわれとらへとて一物のありさまに
鶺鴒の鷹とも云あれを付てる鷹といふ名なれ
乃ふしようの鷂あしなれある也
惣て是ハあらはそれ也

鷹のことの鷹
鷹のことの名ハあたりたる名をゝかけれ
かるかへしのことはいそうにとくる
顕昭云鷹ハたとへハ鷹の名鵠のハ屋鷹尾
町儀鷹とく二の種をあやまりたと八
鷹乃粽の鷹ハ法をあつかひふれのいひ
町ハこの田乃町の鷹にとよこらと海ともか
名ハこれをとかひに鷹ハ成人の名あれ
あそこの本ハ人ハ大井の鷹の中
紙とい名を種ハ尾乃中のさのあつる

なりやうを畫よりもふくみを持らしめかく
鷲矧おくくやハおるゝ公我から何もかく尾乃本羽とみ
おくくおの無さなりな女の人君とよふと云けれ次
ときこおし傳りさ万葉よハ上の矢を矢形尾
とる字わ何かり海乃風り浪んだり
縹渡授云尾よ何かり海と云栖乃あろかともして
杉尾風とこをとあのちらふるゝとへやつ紙
鵯やとこをとらゝちらひくくさりくろ也
青より家授云矢乃くふくころを矢筈と離るゝ
奥より義授云　尾花有の矢乃羽乃風とりけり

あるるあまよこゝろなめ羽なめゆるり
杉尾若ぬ云
こそゝこ風よりとそころありり日まりんしく
杉わり羽なく杉るやっこゝ矢のなめり
海より羅人乃なめり
まとく流くはやのつりよこころ鷲ハ
まへくり九よろくあり主白和れなめり
観昭云海よりは無乃なめりくくまり羅乃なめりとも海
りや無くとあとる同よ羅るる物たちりもしくまの
なめりとへなめりふハおりふくろふ書りなめとゝくこ流の

毛のあらなりしるしとあるはしるしをしるしとかなしるしる
すゞしきこゝろもなかりしものしるしなりけるにや
ようしるしのこゝろ海のあとをもし雅俗ともに云ひ文字ま
しらずもんなる海のこゝろもあらん続後撰集冬同じ乃の歌也
よみ乃れたるを入れ哉たり
音に聞紅葉もしるしと八月乃人のよめるうたと
いふ事乃二ツ見のしるし有る海の不知乃のことしもし
乃人のよめる歌しと云ふ類
今こそまし雅人乃海の久しく海を見かへりける
おしき海ともあるを又雅もまし雅俗のもの
海しとかなしるのまなりもあらず真白といふ
も海の末なる物なり又万葉の歌にも海ニ白
大鷲ヲ弃とあり
海とあるなる海もしくハ麻(ソ)之路(シロ)ともよめる又字
もあらんことなど
海のこゝろは麻之路乃海の紙屋と云ふ人
いふのあらしゝ清く詞をしてしるしなる
あ雅も海ニ白大鷲ヲ弃のことありてもしるしを
もし雅人の歌海しと同じ事類ともよく今や見えん

袖中抄第十

目録

もゝはゐるの　あ乃むことゝ

おほきおほんも　いもしり絲

あさのおもひ　山となみ川

流く流き　こ山さしまん

な海ちりふかと　ともやたかはしと

あさのなかり　あまかひ

ことかりこせりまれかく をやのなか山　な海こえも能

雅なりみたか川 つかひのたか川 せきのあかし水

袖中抄第十

さくらあさの

萬十一さくらあさのをふのしたくさ露しあれは

あかしていゆけはゝはしるとも

顕昭云さくらあさとは[illegible]酥輕(スカル)成(ナル)[illegible]

苧生とはそのをふ[illegible]云歟[illegible]

ときを万葉には[illegible]の酥輕(スカル)[illegible]

よみわくらあさ[illegible]事を云[illegible]

さくらあさといふ[illegible]の色[illegible]

さくら色[illegible]但色は麻乃[illegible]

あり但古今集の事

をしる所なく蝉丸花林原あさたちく

稀なり人をといふ事もなかりけん

しかるに所々あまた出来て綺語抄　奥義抄

童蒙抄なとより家々の説いてきて或は口伝なと

ありしもいふ所のおもかけ文字を見て秘とする

の趣なとより後へ伝へて和歌の事はさて八

伝へて其中に奥義抄にさまざまのことを云ひ

またの所に云ふ万葉の古事を尋ねしまた所ある躰

此事はさまざまの心侍集よりの秘躰として云ひ

とこそ

今案に日本紀を見る所に云ふ今の名ある文字は

螺（クワラ）贏とうつり蠮螉（ナシ）さえかならずしも所々

余か案に関東へ下りく聞しは何ともいふ蠮螉と渡

く所とかしこそ所の蜂と申せしは何か所々は

同趣なり文書にありける所への志ありしさるを

もし其の鹿ともあらは所を申す源（ナシ）によりてする

或は云ふ詞に付てまたの所々の躰にもとる万葉の

乃詞なとに奥義抄によさそうなと歎きぬるにつきて

世の中をもとの所にありけれしかるにむしろといふ

あはれむかしのこと
かしこきよこのむかしのことはおやゝうら
いさゝ源氏物かたりにちらし録下
顕昭云この歌むかしのことといふ或書云むかしのことをむかしよれ
書をいふなりといへりさればこのむかしのことといふは古事
をおやうらくまゐらせたまひしにといふことよりおこりて
堀川院百首題の歌より續紀録を綴して人のわろ
くありしきなれば誰にや書をみこのしよて
むかしのことゝいひもむかしもつゝん
おほよそあはれ

こゝやへおほみやびとのおほよそころもひさとほし
ゆきのよろしもおほよそころもといふうた
顕昭云これハ神よの宮人かくらの古語拾遺にいはく
云至于磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故
更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二
氏更鑄鏡造劔以為護身御璽是今踐祚
之日所獻神璽鏡劔也仍就於倭笠縫邑殊
立磯城神籬奉遷天照太神及草薙劔令
皇女天皇第三皇子母遠津年魚眼妙媛豐鍬入姬命奉齋焉其
遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰

美夜比登能於保与須我良尓佐佐登保志
由伎能与侶志茂由伎能与侶志茂於保与須我
良尓

今借哥曰

美夜比止乃於保与曽許侶茂比佐止保志由伎
乃与侶志茂於保与曽許侶茂

同之狀にしや義は佐止保也

今案ニ云我らは許侶同なる也佐佐とは佐とゝ同じく

ことやおほよすかえ同なるくされしおほよそ

我しらいふへての我とも頭ゆきのよのふりとも

我しとこれ只助詞也

いしなの絲

石なみのおりねて山すゝのうそめく

山るのうりうえいの絲うてしかくとも

躑躅云いさつ絲といふの根とゑへからぬ絲のこ

ふうまよし般若ぬとかきのわれしめ火いふも

絲あさしこともうすわいをの絲のあさきよくんけ

よあわるりえてこい蝶虫とのうまわいをの絲のゑく

見ゑさすのふゑあいつしても同なくこそとつきゝ闕

ひつ哉之みゑさその躑根あわしとり見らすのとく

ことわりは山城乃へ寒てしりぬるもいとう絲にいとう絲と
同事也石金といふるに付ても石と金とは各別人
各人あれは條事也
長方云
いとう絲乃ありさま流絲の虚しりをもあらしきた
びうけれくは石金といふもあひくしと寄て
竜ま安家抱よいとう絲とくは石金といふまり抱一
私云両事ともに前注中一物義欤不可用
あくのしつくに
あくの絲もるけしを文字乃涌宗のまことにも

あくのしつくはよいともやうかく流る
顕昭云しつくは下樋とかきて琴の腹なる
中は樋にいふ事にて下樋といふ歌をなれかい
ことかくふ絲もあかうといふる哉
あるとある乃ゆ乃ゆも沈乃志るべんあく
ゆかし気色には志うかいるかうも
又は沈よ樋とかけく水底わし全されとも樋と
よ海ん事なうこうのあしるまる絲の此紙始さなを
あくる樋をもし樋ともいふ下人のいわとまで申
を沈水乃いひいひろよまむ八乞つ志らひ香と

ハいひ朽るあとも見る出るにあくるなし

帝王蒙塘志てゐみくとも池乃志る人ま志くて樋を

こしらへて水代に保ゆるをせされしも出るは落ゆるらも

あるはよせくよあるなりへし

今云塘とは池のあつるいをいふそれるに万葉に

秋山乃吉日下（シタヒカモト）ホなりくゆるわかん

あるのとはゆうつしあるとみゆるは傳く

ひ志るはいも秋山つ紅葉の山ますも樋をいふなるへ

われとあへく妹山のまつみとしいふを毎にあらぬさい

りく分のこれ秋山乃下よ保く人の出の見とよかつ

吉日とくり今まの文字ことあやまりて出れ万葉の文字に

とりくるまたあれたと見ゆるなれ　又奇万葉

長哥云

秋山乃下紅葉（したへる）いろとりある四郷のなよ竹よ

あしつ先と云く

此哥ハ吉備津采女（キヒツノウネメ）か死時人丸か作るとあれハ下ゆる

山乃下よ妹とあかつんとさ秋と志る人と云鈍へと

ひと同ゑ意也とあるハ上の分へ同事して下へとそ

又よむといふ事何とくよみつらむ

屋海之詞

きゝのゆきさきをしらぬ山のしつく乃
むかし人の袖の香まとひりかまくらし
顕昭云考万葉云コニ云山乃雫タツトハ者今案
今案するに山のしつくとはよく木のしつくに山城の人
やまひとのことにいふ人はさかさの袖を濡してしつくに山さか
とも歌にも山のしつくむかし人とこそはかへきさかさのとき
ふしくさになそ在ることしにもしきしつく切らの世
手との世の在る有りもしところにもしつくされは
むかし人と謂いひし一万葉云
きゝのゆきさきをしらぬ山の雫之袖

むかし人の袖の香まとひりかまくらし
あまた同袖乃云此山のしつく袖とりまめの袖と乃云
同又為るる化し座すのしつく乃在座すのしつく袖云之
又山のしつく袖とある人云此歌云もやまもしつく
とも書歌云山のしつく袖とは歌らの袖乃ありに
あらはやまのしつく袖とむかし人にゆかむとしける
とものふ人も終るされもいとされと万葉に山のしつく
は遺来うれも濡るしつく袖もひろくも有るしくしつく
見さるり
後撰抄云山のしつくに山に来濡しくる袖なるに

引万葉集注

童蒙抄云山とあまとは海人を云山のあらしといふ

詞也

今云万葉に遣唐使といへる漁夫をし者乃字あり

附くる海人とも共にる歌をしるしあつきたるによりて

いふる万葉抱きたれて遣唐使といふ事をさきやうに海

人あまりハむかへ人もいさ清みまれ事にハいさきこ云ゆ又山

のあまの孫といひむかしもいはす告なと抱くにハあらひくら

守山のあまの事に云或説云塵吉のあまとハ鄙(ヒト)人の清く

里遠邑海のあまとはいふにはあらむ人をいふあり

抱くハ万葉の清からす遊くもく二月もありてと

思ひ又清くよく隔を思ふ人をしらく今云山義あり

てハむかし人のいはる事ハことにありけんさして万葉かれ

注をとりて乃造(ヤマタツ)年にも遠(ト)ト山清歌

清らか清き

ウソウとはれ清くくはれさき清らかにしたり

日はまつるとありあるこせのをはりのし

顕昭云清らかにはれさきハ列ともしはり清らかみ

まろ樣と云歌又芳なり常にあまりよ女員へし夕きそ

あまの来とよりし又云清く流されさしとありあり

きみまよふしらぬハ流るゝ流れなきことゝもあから
流る〳〵とあふ絹もあるもの也
又云こゝ世山是流るゝ流れとさしつゝくま
物かたりまこの世こゝ鏡乃ちゝ乃ふせ
こゝやさとし見ん
むかしちる人こゝやましとて見んまあわとりや
うくたりこゝえんゐさこゝ秋とあり小さらん
顕昭云こゝやさハ名をしる山ゝ日本紀にハ名山とこゝく
こゝやとしてまありとしこハとゆしてとふ詞を
略決ニハしこハ流山中てこん也ともきこハ時ふく
ゆふやみとこそ也君にハ見つけ侍りて君まつやとよめるにこそ
ことハ玄ゝ白も見るま也然るに此なまよく見る
とよもこゝあるも也
夕暮かきころハ夜よりも葉かりも見る事一ツとも
いやとよるとそうちつゝもしきつゝかし
山まりの世代にもそしれぬ事なりの夜ふき家
あまあるいの代の事にも君の八流
長云是かくそのいとなりてゆくそ
ゆきこハふりかかる
并よりて事の心も稀なり君くいこそ稀にゆらし見ん

なしと同詞なり故なし
しなるちハゆかしき
なとなるちハゆかしきとハいはれとうらみなく
志なるやいはれちはなりしきしなるなり
顕昭云なそらへたる神しハゆかしいはしめて霊と
かきちらしなるハかなしさと云歌をしなるにハ又しも雨にかく
しなるもなほ給ふ神しとそ也　魄魂とこそなるなる
なにまき翁のもの同事也その神なとハこえそていのち
おもしろくぬとよめる歌ちとしなかし同義なり
又長歌云

おもしろき神もゆかし給へと折んて神も千振日
なるまひとくらてなくくろおなゆり二く
ちらひらちふれ歌文神ちやといふなり赤
まつとし神のめくく代云歌もなる風ちらなも
いろちはめくく給んとくちもひあなく三詞と同
歌なる義也可なる
とりやくなと所く
なるにゆるとりやなるの所なたちもらひ
いろはとくにハこ風りしさや字り
顕昭云とりやとハ得物矣とゆう事ハ物なとこうなと

くさ清まつりし志て争ろうとぬあつる色をとりて今ー
さ婦ん
是引者山ゆるも難ゆへし流る人
ころやたちに於てとみて婦ろうこ西
とるをとあやうき級乃者かまいて総いるゝとあまりとしま
とふあつてむもと所屋を立とんう入し長安云
海とてう知乃得物(トモヤ)矢を出し於てとむらひ
ゑめつまりと山中にのぞり
屋敷をあやまち出て於てとるみハ矢筏一本よ二節
ぬとつくひとつをはハ近流を於てこゑ先んひとつ門を

ぬくゐほまを於てくろをハぬるし麻あくいん
まハその義をあらぬ清まつて石ゝちにこく
むまきゝあるむをもいろ盛衆ゆや
万葉菊物矢ゆこいるまハ二人あちむらひくい
家よ等をおもひよを於てあいる過その
を於て於矢をとりやとゑ過とく
今云ゝ安於て氏を於て屋うとこのいろさ乃
をれて屋うとハくを所存しまりて総いるまり豈
とあらむうふと二三ゝあくゝあるハ於てやみ欽
よとりやとあを於てゝのことゝ清まつてとりやと

いふ事何事と聞えし程にかくもうちすてゝ侍り
たゞうち絶えし事と見えしは侍りと
いふ文字絶てしは離れて紙魚のくひたるそれ
成しをもとめて又はあらたに絶えしを云よ
ても文字の絶えたるをうたかひて見るへき也
或人はこれをいふ鞠と云字を書て鞠と
矢を絶ちて陀ふといふ人あまた有之
ほとあらぬかは程とりかへしあまたあり
さもあるへき事にとりてもかはらぬといふこと
いふ文鞠とも云なり

書言字考に物云をりやゝみ物よあくらやをとこ也得
物矢とて書ける物をとゝめて二も三もくよ
をほとぬくていふ絶の字
あくまで出まの字
あしたさのよみうさうさけてもえ出きく
人まゐりにて出ぬてそこなたり
顕昭云あしくは物字にて桐利と書けり是たりとも
清輔か云紙魚と侍と字も桐と同事也又
あるへき事なりとも字なりともありまたある
事ハ先によく知て可書也

帝王世紀抄云これハ催馬楽乃呂乃うたのはじめの
伊勢海のきよきなぎさにしほがひになのりそやつまむ
かひやひろはむ玉やひろはむといへるうたなり事物紀原に
よめりたるうたをもよくいへり

私并催馬楽のうたハ海の名のきこえけるを
こまやかなるひとにとあるまゝ伊勢事をおもひやるハ見なしく
よみしまうたをよめることの人々君をしらくはなし
おもひ海のうたを出しておもひやりあめ清らの御
ものこゝし鏡入られて海ゝよらて海ゝさす
まらの孫のところ元事をもしれることしく御

私并聖徳太子御製云
しなてるやかたをか山にいひにうへてこや
せるたひ人あはれおやなしになれなりけめや
さすたけのきみはやなきいひにうへてこや
せるたひゝとあはれ
此哥ハ推古天皇廿一年十二月にすくれ給ふハ初句
を加へて短哥のなせり又中四句をも歌のなりとひ人
と書をなせり歌なりといふハみやたりと云ハ同しこ
こゝのことハ文字やの字を略なりくやかなと云
ものゝくしく同じ文字をさせて世乃字を略しく

いふうたを作者あしくらんさんにあまり人々にまさりてかり
といひ雲林やへ庭のかいは雲林に趣てうたかたいはし
詠ずるよしかりはなつるもゆうかんや梅花のよめん
詞之句あらはれん人命者のも始の中の孫と云ハ
甲斐出乃ふる孫やさやうさもかれしりてあれさやう
まもえんらしるなるのいかさ詠なることえんなる
とい云詞ハ禁て詠もあしき句のめ事やあられ風
俗といふてもの因事まもの因のふくつるもかたらつる
物かりされて風俗といふもの因の事しらは
まあたれん

新古撰利といふうたの事(コトハ)粉をかくしもて歯んさう
いろく
早あのくひ
まらしのまむ法のやの山乃をこくさくい川乃
その波のうへよりも雪のくる物しめ
あさくこのゆきさあつめ
加賀(カカ)布(フ)罐(カヽヒ)辛よ
あの法のまんまにされてもかよめしもつれ
ひふもあめくこへこのやま我うきつくる袖の
むつしふりいさあまとあや我きくれの二八(メク)ミ自然

もろこしあしもとうんぬ
顕昭云あしびきとは万葉云蠅音ばかん東俗語云
日賀(カ)我(カ)此(ニ)といふ今云ひくといふはあしくといへれ
ある女をいふ此ハ也二流布二本二嬪音云曰作ニ
蕃云婆娑称云
ひとつあるをもちひきもよせいふとよめり
ましのまへをすゝむといふまて
越中守家持卿の哥にもあしひきのやまとよめる
てく称に女をいふよとよむへき也ととる
あしく称とも物のあしきとはやくとよむ

此哥とへかよへる道にある山をいふといふ
今云ましのきてあしくいふあしくといふ頌同文去
万葉常陸防人哥(カニ)云
あしくそ称よ不(?)あしくましの称乃ま絵
るあしくあらんあらそいたり
しるしるんはこのくひの山ハ流布山のかり
てよこゑありまへ称も称よ不あしくましとも云
哥もあまてゝ女をいふ足よりあしくのまして
のこる山路の中にとうひくもあしくひとよめ
ある人ゝあしく称をもつ山といふかといふく

かひ乃志ろ孫あひしの志ろ孫なとゝいふことなとあらハ
しらぬ也神宮え越前守なれとあひしの志ろ孫
なほのゆゑにさるれとよあつまこそ
よこかりこせる　希さかく　高乃みね山
かひの孫たまさかやまとも見へしりきくまゐらく
よこかりあせるやまさや乃なみに見へし
顕昭云よこかりあせるとハ誘せるといふ詞也或本に
くやみとうきまつともなせるといふ詞とふせるとも
ある本に帰るとこそあれともあすは猶しきを混なりとそ
かりさいハこせるとこそいへり

又宗長云きゝ侍りしハくまなくしらなし
かなしこゝろさの文意かよへりゆへ予ひとつく
今案此の人いろ〳〵さこそあけくるしの文意あかく
をけくハあまるりまたあるたり或ハきこえしらぬか
くらしうゆゑよりこの文字代しかといへ紹のけしき
ふくいのくまに武はこのまいるかきへ書中あや
しらぬおもへくまてころまやさかや乃あらぬ山しくれ
越中乃国よあわり村比山とて二の不審あり一ハ
ハ所作に云長左衛門尉の申山といへり予按
後撰にても所よのよしあり能登かれば未詳さやと

くまりて又金谷よりさやと云郡あり又さやまのこえへ
こさかへいひたる後も末にさやの中山といへるも
さかりのさかりとしわたる乃婦る乃まへ返あ民ふり流
は和歌にいひなれども其の事ありてし二十八歌
路に云下総へ下向し時はさ民部乃中まへさやの
中山とのへりあまて又いつしとききてあ可とうしれ
あり山さきの中山なとのへりたる中山返中山
とのへりあはれといひつし撰集云
あつま路乃さや乃中山なかなかに
みをはなれしとおもひかけしかは

中山なれどもこえてゆくとはいへ
古今にいへるのみかは東乃中乃中々にともいへなる
なとこそ後なれはさみちとよみてゆきし中々なりと
云詞なく雑しうたにしりは関の清見のまつりこさ代も
山また新古今集まても定家卿まてくわしく有る山なれは
此山とこそと歌きの流なる事は二三ヶ所にあらく
続乃山本まてさ山とらく重ねべし
又此家の歌をかくなれのに一所をもあへの歌一所まて
よくよくみの物なれとも此ことのありといへるいりくれとき
あなた此方にいふかくさやの中山をなんかいの気をつゝきを

くしあらん事よめりこむ人あらんあらそひたらは
いはこしくも承なくぬなとやいでゝも甲斐へ入る人
也郷仲(ナカ)のはさや坂へのよこく中山は当郡なりと
し篠原の国之歌に教政なる人さやはいはれ
の道をへく越山といひける歌にも民説ある也
不同なれとも丞可後之次
云名抄云きてまうちかくなんとよと云詞なり
甲斐国の風俗やよこほりくやふとふ事の
ある所に多く歌ある山なれとも甲郡よりもくらわ
てくひの方ゆく孫を世ぬくけくて世祢しよある

すゑはくやまとのつる詞に駿河国のふせり
と云詞也此さやの中山は遠江也と駿河に
との中にあるや
奥義抄云此哥常通にはよこほりくやふ
といへり或人云さやの中山は甲斐よりてわ
てまうてしよこほりふせるといふにあるへよ
こほりふせるとはさきあるなかはひらかなるへ
よこほりとは云事はなうしとや勝と云者自他よ
は東の方より山のよこをまうて伏ふせへし八幡
云ふかて竹の下の詞のあるをふみて座

つくし山崎郷にまうてけれはとよミて給ハひつく
あまたハよりとおもしく俳しきなりてまことかりこ
せむとおもひてあやしき歟
私云こゝろこゝろせるを云ハここたちりとゑせると
んえハ鏡なりよ山ふまし或人もさしえてかさ
被りんなく宮跡よ出しり由所と心をむかひれ
よここそもり山崎の山ゟみとして宮されはや
かうひとおもれとそこ
齋藤報云ここかり崎さきとハ宮乃跡ふ山崎
をゆくとも山崎のしかりたりて由めともしかへか

つま崎さるくそにゆかまさ男山と云土左日記よ
よここ都まてる山あかりもや山崎るまわきわとこゆ
かうりて二十人さし又所しつて云ふ由てる禮
るわとうて宰事かみくるひ所し進とくろきて
私考土左日記云十一日雨いさゝかふりてやミぬ
かくてさしのほるに東乃かたに山のよこほれる
を見て人にとへハ八幡乃宮と云これを聞てよろこひて
人々をかミたてまつる山崎乃はし見ゆう
れしき事かきりなし此ニ相應寺乃ほとりに
しはし舟をとゝめてとかくさたむる事ありこの寺の

こしのかくれに柳あかりありしを
綺語抄奥義抄かしらにきり童蒙抄にはなかり
なしに

魂極といへる

玉魂(タマキ)春(ハル)内(ウチ)乃大野(キホノ)に馬なめて
あさふますらんそのくさふかの
顕昭云玉きはるとは魂極にひさかまれと云義
まの字を略して云歟さもあるにや義をよせと
よめる哥を按へし
魂くふあひくみんくいふとこして霊魂(タマキハル)

命(イノチ)に向(ムカフ)の意也又あめ
あめくしほあくるとそうくとはあまさけの
かんつかさ氣(イキ)をあらくかりもゆ
あくて乃そ意はたる猶ともぬまにたる
いのちもまたれきさをまくまも勝う
魂極きとは氣もりふゝる意を
いりふせてのくら翁りり侍ん
さ極をかわる氣ふちん晝椿を
むさとふんをとあつくしくそ物りふ
六
此哥の魂ハ魂極のひさいまつとへぬ待へし又云

きハ年のはじめの事なれバ[illegible]
よあり同じ類
年切(トシキル)よ海くたちめぐる事なきより
てよふくの事なるむ
又若芳叢長壽云
靈魁肉限者 南贍部州人壽一百廿年
くともあらんをいふなるべしやまとあらんを
云々
びまの浦よりふくるよせくるより[illegible]
い海乃く海きうのちのあれ乃[illegible]

せおくもるはまたなにかも事はハ別ならや
こしゑさきいろをはじめて事とするの祝[illegible]
千蔀録黄帝与蚩尤合戰于坂泉之野蚩尤
有鐵身黄帝之前帝中黄帝御天大祈之時玉
女降自天反閉蚩尤身如混沌解被斂畢 仍取
蚩尤頭毬之取眼射之云々又云毬杖是也以彼
例漢土年始用件事國中無凶事云々仍日本
國學其例年始打毬杖然則毬杖玉魁春と
こゑ云々
今ま此義あるとるべし類

又云ふ乃流乃栖をかけるよむ乃字形にてふ
まことむさこそ浦と云歌内と並ぶれハ九前書の
かたくかなくて浦の名又大野と云人も難義かなくて
くる海きかりの内乃かきかとも云内と流くきりれ
と万葉の注よい乃ちとこのミ流まてそ其ハ翻案之
又いそかき潮と流くきてる事あり
海とうかんといふかなやむきかり
石垣潮（イソカキノ子）乃くまへかなる流ゆり
是ハいそかきこそをかなくる歌流に歳かなくる歌ヨ
万葉ふ卷鑄石垣潮（キハツイハカキノ子）と云事もあり此ハ又翻の

事歌玉限をよ蜻とおやまろくそけるふ云
よあらの歌くも海乃字かんえ一種かなし
くあ海きかりのやのくへよらあん露
もうくくいそてまれにかり海もりく
是ハ歌在歌名むる歌又歌義をよめる歌れ
かりのまし
名乃義云事は魂こさいまつのもよ書くるわ
人乃ん玉世海のやくい海いかそくまれかちし
とまき也又あ海きかりの花大膳といひさ
海きかりいそくき他ちかふ愛ちめ乃そり

かくて稀に出ることにたへて波の橋をわたる
ほとりにまかりてすみけるを詞をきゝて人
ある日もとに稀にまゐりて歯をとりけるを
かなしとくいへるも此乃事もいたくなる
をかなしとくいひけるにあまた武内にあひ
ても志るへきと亂をまもりてあり
さまにしるべくも思ひける神の宿禰の
よりひさしくうつりなことてもめぐる
尊武内宿禰は応神の御時に召されけるのみかど
また亂乃物乃いひ其くを歯のいとなみ
とくゝ日本紀よ武内
乃宿禰乃悪態にをそへてせめけるに
あいゝてぬりなどのと紀 よ教目をも人
くゝ宇治川あたりとて武内宿禰寿百
あそこ乃とせてきまりてうつりつくなる
あらはをと宇治よりて入流
とやすくめぐるにやさ稀とせてゆく
こゝも志をきかるもいとく武し
今も此寺の者家りける是を宿禰も此義にて
ことに宇治よりて入流といふ詞をも閑此の事

まことにせのうちいまた氏の万葉乃しるしにハ舒明
天皇遊獦内野之時中皇命使間人連老
獻歌乃反歌也
乃ちりれ志ゆの内　あさひるの思ふの内　せくいの志ゆの内
いかし人まれ雅をの此志ゆのあめのまれと
とせのかまむ人をともむ（うさ）
顕昭云野をのれ志ゆとハ膳慶乃暗見野と云り
ハをのれのきれとこのこなれと件志ゆとこう
人まれしハめてハ紀志のあせとこく
伝背綴國をの杭云野伴の志のまとハ（ゐ）とこくの世禮と

いつりの葉云を祇もまくとこのめ宿乃をのまれ
志ゆとのへとれありれめ倫しのとれ野伴
乃志ゆいあつく此をのとの志のをまと志の欣
む人まれく倫れ廉をふむつしれを法てしをし
く祖かくし人まれわくのへ倫つれをまをりとの
をる勝志乃ゆめれをる宿むをふつしまよゆわ
をるをせ印くしてをのの乃ゆ宿を野伴此志れ
とハりひをのつりしゆめのあくをて　後撰ゑ云
いゆりへまれ野伴此志ゆの淀かくつり
さうくむ柏とをあとこ野りきり

みるこのめにふりきむとゆかりく
まうこめハいとくあさかきやはねかん
堺中の清水あかさまに侍りし
拾遺集に娘かく詞ハいかなる人に元輔か侍りき
しるよる
萬葉集の歌にいへるを
むかしのひとハいかにかきかす
同集に...女房の文にもまかせつら
入れし宇都宮中務
...あいハ...かけ...

う浪のきさや狩んとくもとめやと
ひきとハ三船古今のいかしへ中納言清水
ぬまへかれくいかあらせよめしゆくよあるか
文治あ云
大和物語の君かくいふに
又もあひをんおもひかかきされ
ひきあらせ堺中の...よかの杉か
...いふこと...
殿ひかなよしへし後宮綱かく浮...よう
...よふかくいひかんとも女あかふ

さらのまたなかひあらくたなせ給ふゆかり孫なれとも
おもひにしつみてありけるか今はしられぬよりけく
浦ならしならぬ
ゆく末の露もおもひしはれる
ゑまひのあはれさや限なかりけん
女の恵み事におもひの人の思ひしにもや世にありけるにひ
さに重ねて大原や朝の人の思ひあらん乃岑てんは
なからいうことなさけはよりて上と六条修理大夫
乃後八といふ左京大夫中に住して後に都に帰る紀伊錦園
素猿おもひの君清をは山城国大原郷よりこそ

いつり成人の中には江文乃あはれにあり
良暹大原乃山荘の名にて後拾遺に良暹
法師大原に移るとてとなしける
素意
月くさにおもひの思ひしに入もすみて
何と月乃今はいつなみや
久し
絶えてや月をみん大原や
おもひ乃おもひをうらみて
芳侍撰梅和歌集むかし恋の幾代ぬさまさりて行

道よりかゝる事ゆへわくこのまむすとゆゑなき
とゞまらず清水ハてふむすびの水をくみてさらく
わくの水のよきにかはらて水をくみよかれと
そこの事ハくみゆくまゝの水をかくし事まて
大原やせがいの清水むすびてもあかぬ心よ
あらやどこにも人をいはぬとも
文禄年中物の中よ載哥
大原やせがひの清水ひさごにてくむ
とるハあくとよきあそこなくゆかむ
あふさかハ清くこの水をよあるゆる大原よおほなる

乃きゝかゝるのかれ志らぬあるよしこそ猶よきかな
のよみ人は大原よあれどもこれめでたくいふてくる
むかしをかしき野守の志ミつはいづくの野守
あまてらすかみのさとあめをちぎりて名を
まへにいひまゐらせよ海をもおもひやり志らぬそのいふ
なる様とこそうたのこゝろめでたし
和歌秘抄よ大野守の志ミつハ清閑寺よあり
ともいふ
奥義抄云野守中此志ミつとハ此志ミづの事
なりあらはすよ亦今の清水寺とさだめたり

よろつの事よりもしこのみちはまめやかにこゝろへ野よ
ありの地女は始めてよろつのふかくこゝろへあつくもてなしよ
心からよ勝くく人をもてなしさめてかなしむへし
諸人よろつのこゝろを事ゆへはめてよろつ色のみちを
しらすさまなくよろこひくゆかしくよろこひくさまて
たのしよろつへしこゝろゆたかにおもひて
まなくありてかくして情にたる事をかはくして
事あるよりはるかにあるこそなれなれよろこひ
よろこひ人をかゝ恋はかくしてくるしきや
されは人のこゝろをしりて事をしられたる事

よろつこゝろえへし
好色の道にはよろつ事のふかくこゝろを事なんあるへし
は義理をたゝしくよろつのめんもくゆかしくゆかしきの色あれ
はなはたしくかよひてよろつのいろかはかなしからきこと
しかるにこゝろをつくしてさよひなるかのあはれのかなしく
恋をしるへくは人をこゝろにかけて事をしらしめてあるへし
しかるにはあるへきことをはかなくあらし
基俊の道は不孝無益なり
いかにも人のことははかなくよろつのかなしき事
後生の始めをしかりそめなき

あまたの宿まもりまえあつかひならんとせさるなり
ありける人一夜をさだむる事もなくあかしはてゝ

大日本帝国図書印
日本政府図書
内閣文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan